



広がる農福商工連携

厚労省・農水省幹部が視察

6次産業化ネットワークを構築 障害者支援で地域全体が連携

障害者の就労支援などを行っている社会福祉法人進和学園「しんわルネッサンス」(神奈川県平塚市)での農福商工連携の取組みを厚労省と農水省の職員が3日に視察し、関係者らと意見交換した(主催・日本基金「ノウフクプロジェクト」)。視察した農水省の田中昭久・大臣官房審議官(農村振興局担当)は農家の労働力不足の問題を指摘し、障害者の積極的な活用を提案するとともに、「マーケットの開拓のために知恵を出してほしい」と話し、厚労省の内山博之・障害福祉課長は「障害者施設が生産拠点としてかなり可能性がある」と感じた。農家に「プラスになるように農福連携を広げていく工夫を省内で考えたい」と述べた。

進和学園(出縄雅之理事長、久保寺一男統括施設長)は昭和33年に知的障害者の支援を目的に設立され、今年で58年目になる。現在は就労継続支援から自主製品の常設売店まで15の施設を運営しており、しんわルネッサンス(瀬戸利彦所長)では、就労継続支援事業A型およびB型と就労移行支援事業を行い、知的障害者、身体および精神障

害者が利用している。しんわルネッサンスでは、このうち農産品加工事業は、平成25年10月に農水省6次産業化認定を受け、翌年6月に開始した。事業展開に当たっては、実施主体の進和学園、促進事業者のNPO法人湘南スタイル、原料供給を担うJAOおよび農家、協力機関の神奈川県農業技術センター、平塚市など6次

産業化ネットワークを構築。トマト、ニンジン、ブルーベリーを中心に材料調達や加工販売などで事業連携している。視

察を企画したJA共済総研の濱田健司氏は、地域全体が連携しているため、永続的な取組みが期待できるとし、「農福商工連携の理想に近いモデル。全国の人に知ってほしい」と話した。

異業種間の交流も収穫

意見交換会では、6次産業化ネットワークの構成メンバーと農水省および厚労省職員ら合わせて30人余りが参加した。農水省の田中大臣官房審議官は「自動車以外に活路を求めるのは大事、

よび低賃金など、農福の課題を解決する取組み。近年、商工業への展開に加え、認知症の予防や高齢者の健康増進など、福祉だけでなく、医療・介護分野へ広がる可能性も期待されている。

仮に「自動車の全自動運転が実現すれば部品の数が圧倒的に減る」と指摘、経営環境の変化に対応し、新市場に挑戦することの大切さを強調した。一方、研進の出縄社長は6次産業化事業での設備更新計画の変更をめぐって申請手続きが手間となって現場の要望に即時対応できない現状に言及、本田技研工業との事業ではスピードと品質を重視していることを強調したうえで「6次産業化事業のゆたかりとしたスピード感が非常に耐えがたい。もう少し小回りが効くように柔軟な対応を求めた。

今後の目標について瀬戸所長は、「スタッフと障害者の力量アップおよび品質の安定化」を掲げた。収支については「品質向上のためISO9001も独自で取得した。本田技研工業との取引は40年以上の実績があり、社会貢献策としてではなく同社の購買本部が直接発注している。独自で治具を開発し、だれが作業しても安定した品質を維持できるよう努めている。農産品加工作業でのトマトジュースの瓶詰工程」

しんわルネッサンス

しんわルネッサンスは、丹沢山地南方に位置し、周囲には農地が広がる。施設の建物は、鉄骨造一部鉄筋コンクリート造3階建て。敷地面積は約7600平方メートル、延床面積は約4850平方メートル。7月1日現在の利用者は、就労継続支援事業A型が20人、同B型が78人、移行支援が21

人の計119人で、職員は48人。利用者の平均年齢および給料額は、A型が男性46歳・女性32歳、平均43.2歳で、給料は月15万9164円(平成27年度実績総額平均)で、B型は男性38歳、女性43.1歳、平均39.3歳、移行支援は男性22.7歳、女性19.5歳、平均22.4歳で、工賃(時給制)は月4万7740円(平成27年度実績総額平均)となっている(写真⑤は自動車部品組み立て作業場)。



しんわルネッサンスの正門



同事業の意義について久保寺・統括施設長は、「福祉だけでは周囲が見えなくなってしまう。『異業種の人と交流して刺激を受けることが収穫』などと述べ、濱田氏は、「意見交換会でこれだけ多くの人が一堂に会することはめったにない。『今回の気づきを地域のために生かしてほしい』と呼びかけた。

成27年度は大赤字だったが、今年度はそれも縮小し、平成29年度には収支をゼロにしたいと話した。